



TITLE:

時の記念日を迎へて要望す (時と暦の特輯)

AUTHOR(S):

吉田, 由男

CITATION:

吉田, 由男. 時の記念日を迎へて要望す (時と暦の特輯). 天界 1941, 21(240): 188-189

ISSUE DATE:

1941-05-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168201>

RIGHT:

其の優劣が一目して判るだらう。

世界暦とグ暦區分法の比較

		一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
月	グ 曆	31	28(29)	31	30	31	30	31	31	30	31	30	31
	世界曆	31	30	30	31	30	30(31)	31	30	30	31	30	31
四半期	グ 曆	90(91)			91			92			92		
	世界曆	91			91(92)			91			92		
半 期	グ 曆	181(182)						184					
	世界曆	182(183)						183					

又昭和2年の金融恐慌以來、制定せられた銀行法により、現在全國の銀行の營業年度は一月から六月まで及七月から十二月迄となつて居て、暦年度と合致して居るが、其れ以外の會社・工場などは大部分營業年度が上の通り暦年度と一致して居ない。例へば決算期が四月と十月のもの、五月と十一月のものなどになつて居るが、此の世界暦採用の曉には、四半期と合致させる必要があるから、營業年度を銀行と同様の決算期に変更すべきであらう。之は一例に過ぎないが茲に附記する。

要するに世界暦とグレゴリオ暦との日附の相違は、僅か1日か2日のことである。皇國3000年の將來を思へば此際一時の不便困難を忍び、一新斷行すべきであらう。

× × ×

次に現在用ひて居るグ暦の一月1日は、殆んど無意味の日で、只年の始めであるからと云ふので祝つて來たのであるが、理想としては冬至か立春の日を歳首とすべきものなのである。

天文學上は冬至を歳首とする方がよいが、神武天皇が橿原の宮にて御即位の式を擧げさせられた皇國紀元元年一月1日即ち辛酉年春正月庚辰朔の日は、立春の頃であつたから、立春を歳首とする方が、我國のためによいと思ふ。立春を歳首とすると、春夏秋冬の四季は世界暦の四期と全く一致することになる。此點非常に好都合である。

然し之れは世界暦を實施の上何年かの後に於て、改めて第二段として採り上げ考究さるべき問題である。(皇紀2599年六月18日誌)

時の記念日を迎へて要望す

私は時の表現法に興味を持ち我國民一般が現在慣用しつつあります處の“時刻”と“時間”の表現法の混用を避け、時刻と時間との用途を明確にすべしとの所論を抱く者であります。

即ち「時」を區分して時刻と時間とし、其の區分には、時間には“間”を附すべきでありまして、時間の意味十分なる場合は間を省略しても差支へありませんが、此の省略の場合に反しまして、“間”を附すべからざる場合に“間”を附するのは不合理であり、又不必要では無いかと考へるのであります。斯る意味にて、從來吾國使用せられて居ります「時間勵行」「日本時間」「汽車時刻表」「默禱の時間」、其他時刻指示の用語は「時刻勵行」「日本時刻」「汽車時刻表」「默禱の時刻」等に是正し、“時刻”としての表現を明瞭にして“時間”との區別をすべきであると思ふのであります。

昔から我國では時の知識、或は關心は餘りにも貧弱に過ぎるの憾みがあり、就中本件の如きでは、上は官廳、下は一般人の間にも恬として顧慮せられず、官公署、新聞、雜誌、學校等の間にさへ此の是正論を笑殺し、或は時刻と時間は同一義にして是を改めることは無用であり、文字言語への遊戲なりと答へて居る次第であります故、是に依つて指導せられる一般人は推して知るべしであります。昭和11年十二月7日文部省編修課は本説に對し「時刻と時間とが明瞭に區分される表現法に従ふべきであるとの意見には全く同感にて此の點については今回新に編纂された算術書に於ては既に第二學年用上巻より十分考慮致し居り候」との回答に接して居りますが、他の方面、即ち吾人の生活に接觸尤も多き前記指導者方面に於て、依然是正せざるに於ては日暮れて道遠しの感を深うする次第であります。

時の記念日も回を重ねること茲に21回、秋恰も我國未曾有の國難來に際會し國を擧げて一億一心協心協力、一段と精神の緊張を須要として要求せられるとき、過去の如く唯時の歴史を敷衍するに留めず、本論の如き用語是正を各方面に慫慂して刺戟を與へ、以て一般人の時に關する時局の需める知性を喚起し、古來あまりにも無關心なりと云はれる「時」の運営に遺憾なき生活體制を整備する様渴望するのであります。

東亞の新秩序建設運動に乘出して茲に四星霜、今亦西歐の野に空に硝音しきりにこむる秋、東亞の盟主を以て衿持する吾人が、其の半途に於て物資の缺乏並勞力の不足の爲め、敵人をして其の成果を危ぶましめるは甚だ恨事であります。此の危局にのぞみて今尙時觀念缺乏の爲め、舊態依然として諸種の指定時刻に遲參するが如き舊來の陋習は、今こそ敢然打破し、此の銑後の危局を救ふの法顯著なりと云ふ日光節約法の如き、時政策の施行を一刻も早からしめる様指導者並有識者各位に皇紀二千六百一年の榮ある時の記念日を迎へて要望する次第であります。(兵庫縣飾磨郡廣村日鐵社 吉田由男)